デート DV における被害観と加害観の差異-

赤澤　淳子[1]・井ノ崎　敦子[2]・上野　淳子[3]・松並　知子[4]・福留　広大[1]
([1]心理学科　[2]徳島大学キャンパスライフ健康支援センター　[3]四天王寺大学人文社会学部
[4]同志社大学フェミニズム・ジェンダー・セクシュアリティ研究センター)

本研究では，まず現代の若者の行為を捉えうる項目を含めたデート DV 暴力観尺度を作成し，次にその尺度を用いて，大学生 87 名について性別やジェンダー観による暴力観の違いを検討した。その結果，女性のほうが精神的・身体的・性的被害観のいずれも男性より強く，強いジェンダー観をもつ男性は性的暴力において加害観・被害観が弱いことが示された。

【キーワード：デート DV　被害観　加害観】

問題と目的

近年，夫婦間の暴力であるDVと同様に，「デートDV」という恋人間での暴力が若者間で生起し，問題視されている。ネット社会が進み, LINE や Twitter などを日常的に使うようになったことで, SNS を用いた暴力も増え，デートDVにあたる行為は多様化している。

研究者によってデート DV の暴力分類は様々だが，概ね「身体的暴力」「精神的暴力」「経済的暴力」「性的暴力」の 4 種類が用いられている。内閣府では, 1999 年度から 3 年ごとに男女間における暴力の実態について調査しているが，最新の内閣府 (2018) による被害調査においても，この 4 種類の暴力[1]について調査されている。同調査では, DV に関する暴力観について問われているが，どんな場合でも暴力にあたると思うと回答した者は「足でける」の身体的暴力で 85.0%であり，「嫌がっているのに性的な行為を強要する」などの性的暴力で 77.3%と高い。また，「家計に必要な生活費を渡さない」などの経済的暴力についても, 68.2%の者がどんな場合も暴力に当たるとしている。しかし，精神的暴力においては「職場に行くことを妨害したり，外出先を制限する」では 68.8%であるが，「大声でどなる」では 39.5%であり，暴力の内容によっては暴力とみなされにくい行為もある。

精神的暴力の定義については，他の種類の暴力以上に曖昧なものであり，その多様性が指摘されている (赤澤・竹内, 2015)。身体的暴力や性的暴力は暴力として認識されやすいが，精神的暴力は客観的な証拠に乏しいため第三者に理解されにくく，相談した相手からも傷つけられるという二次被害に遭遇する可能性が高い (鈴木, 2007)。ところが，内閣府 (2018) における交際相手からの被害経験調査では，恋愛関係の中で最も経験したことがある暴力は全ての年代共通で「精神的暴力」であった。このような状況を鑑みれば，精神的暴力への認識を高める必要があるだろう。

さらに，近年では, SNS を用いて行動を監視するなどの暴力や過去の交際相手に関するコンテンツ (個人情報，写真など) を嫌がらせ目的で SNS や画像投稿サイトなどの CGM (Consumer Generated Media) を公開するリベンジポルノといった新しい形態の暴力も生じている。林・山本・中村・田中 (2015) によると，リベンジポルノとは，別れた元交際相手が，相手から別れを切り出されたり，拒否されたりし

[1] 内閣府(2018)では，「身体的暴行」「心理的攻撃」「経済的圧迫」「性的強要」という言葉が用いられている。

たことの仕返しに，相手の裸の写真や動画など，私的な性的画像を無断でネット上に公開する行為を指す。

このような暴力を測定するための尺度が開発されている。欧米では Straus (1979) により「(身体的)暴力 (violence)」「言語的攻撃(verbal aggression)」「話し合い (reasoning)」の 3 つの下位尺度から構成されている葛藤方略尺度 (The Conflict Tactics Scales: CTS) が活用されている。後に CTS はいくつかの批判を受け，改訂版の CTS2 (The Conflict Tactics Scale Revised: CTS2) (Straus, Hamby, Boney-McCoy, & Sugarman, 1996)が作成された。CTS2 は「交渉(negotiation)」「心理的攻撃 (psychological aggression)」「身体的暴行 (physical assault)「性的強要 (sexual coercion)」「傷害 (injury)」という 5 つの下位尺度から構成されている。CTS や CTS2 は，米国等において親密な対人関係における暴力を捉えうる尺度として有用かつ頻用されている (Frieze, 2008)。しかし，日本において CTS や CTS2 を使用した研究は少なく，国内のデート DV 研究では，先行調査や研究を参考に独自に尺度を作成したり，自由記述や予備調査等から抽出したりするなど，研究固有の尺度を使用することが多く，これに代わるような有用性の高い尺度は開発されていない (赤澤, 2016)。また，欧米で頻用されている CTS や CTS2 には，経済的暴力や SNS を使った暴力など，実際に経験するリスクが高い多様な精神的暴力が含まれていないことから，現代の若者のデート DV をとらえうる項目を加味した尺度が必要であるといえる。

そこで，本研究では，多様な精神的暴力に加え，経済的暴力, SNS を用いた暴力など，現代の若者のデート DV を捉えうる項目を含めたデート DV 暴力観尺度を作成することを第 1 の目的とした。まず，予備調査を行い，現代の若者がどのような行為をデート DV の暴力として認識しているかを調査する。その結果を整理する際，精神的暴力は多岐に亘るため，暴力の特性を考慮しながら項目を分類・作成する。赤澤・竹内 (2015) は，先行研究において取り上げられている精神的暴力を概観し，暴力の目的や被害者に与える影響の差異から，「被害者を周囲の人間関係から孤立させる暴力」 (以下，孤立させる)，「被害者の人格を否定するなど，自尊心を低下させる」 (以下，自尊心を低下させる)，「被害者に恐怖心を植え付けるなどして，服従させていく」 (以下，服従させる) の 3 側面に分類している。本研究では，この分類を参考にしながら，暴力の認識を測定する尺度を作成する。暴力への認識が低い者において，暴力を行使することが明らかになっている (e.g., Arias & Johnson, 1989; Dibble, & Straus, 1980) ことから，暴力観について検討することはデート DV の予防にも役立つものと考えられる。本研究における暴力観とは，ある行為を暴力であると認識する程度のことであるが，本研究では作成された尺度を用いて，自分が相手からされた場合 (被害観) と相手に行った場合 (加害観) で，ある行為を暴力と認識する程度に違いがあるかを性別と性差観を導入して検討することを第 2 の目的とした。

これまでデート DV の暴力観についての調査では，特定の行為をあげ，それが暴力にあたるか尋ねており，自身がその行為を行使した場合 (加害) と，その行為を受けた場合 (被害) に分けて検討していない。また，暴力観の性差を検討した研究では，性的暴力については男性より女性が暴力行為として捉えているという結果が示されているが，身体的暴力や精神的暴力では一貫した結果が示されていない。しかし, Frieze & Davis (2000) は，男性が女性に対して身体的暴力を与える場合と，女性が男性に身体的暴力を与える場合とでは，同じ頻度であっても受ける側のダメージには差があることを示唆しており，被害観と加害観に分けた場合に，そこに性差が示される可能性はある。李・塚本 (2005) においても，相手の行為により命の危険を感じたことがあると答えたのは全員女性であったことが報告されており，同じ暴力行為であっても，暴力被害の認識は女性が男性より高い可能性がある。

性別以上に暴力への認識に影響を与えるのは，内面化されたジェンダー観 (伊田, 2010) や，社会的

に構築されたジェンダーである (Wolfe, Crooks, Chiodo, & Jaffe, 2009) とされている。李・塚本 (2005) では，「女性は，男性の言うことを素直に聞き入れるべき」という伝統的なジェンダー意識に肯定的であるほど，被害・加害経験が多いことが明らかになっている。さらに，西岡・小牧 (2009) においても，デート DV の加害男性の性役割観が平等的でないことが報告されている。男女に関わらず，ジェンダー観が伝統的な者においては，女らしさ・男らしさへの拘りが強いため，男性が暴力を受けても被害と認識しない，女性が暴力を行っていても加害と認識しない可能性がある。本研究では，さらに暴力観を被害と加害という 2 側面に分けて，性差やジェンダー観がどのようにかかわっているのか検討したい。先行研究では，暴力観は性差のみで検討されることが多かったが，ジェンダー観を含めることにより，伝統的ジェンダー観が強い男女は，「女性は男性に従う」というような考えに肯定的である可能性が高いため，被害や加害を暴力とみなしにくいという結果が示されるのではないかと予測される。

方　法

＜予備調査＞

1. 調査対象者

広島県内の 4 年制大学に通う大学生に対して質問紙調査を実施し，大学生 55 名 (男性 26 名，女性 29 名：M_{age} ＝20.16, SD＝0.64) が調査に参加した。

2. 調査時期

2019 年 6 月中に実施した。調査は授業時間に質問紙を配布し，回答してもらった。回答に要した時間は 10 分程度であった。

3. 質問紙の構成

(1) フェイスシート

性別，年齢，学科，学年の記入を求めた。

(2) 暴力に関する自由記述

恋人に対して暴力にあたると思う行動を，暴力の種類ごとに思いつく限り，自由記述で回答を求めた。暴力の種類は身体的暴力，精神的暴力，経済的暴力，性的暴力，SNS に関する暴力という 5 種類の項目を設定し，「身体的暴力（例：相手を殴る）」というように例を提示した。

＜本調査＞

1. 調査対象者

地方都市の私立 4 年制大学に通う大学生に対して質問紙調査を実施し，大学生 96 名が調査に参加した。そのうち欠損がある者と，北村・鈴木 (1986) による社会的望ましさ尺度得点が 18 点以上だった者を削除し，87 名 (男性 36 名，女性 51 名：M＝19.72, SD＝1.28) を有効なデータとして分析対象とした。

2. 調査日時

2019 年 7 月中に実施した。調査は授業時間に質問紙を配布し，回答してもらった。回答に要した時間は 20 分程度であった。

3. 質問紙の構成

1) フェイスシート

性別 (女性，男性，その他から選択)，年齢

2) デート DV 被害暴力観

予備調査と CTS2(Straus et al., 1996) の項目を参考として, 34 項目(身体的暴力 6 項目, 精神的暴力 12 項目, 経済的暴力 5 項目, 性的暴力 5 項目, SNS に関する暴力 6 項目) を作成し, 彼氏・彼女として交際中の相手からされた場合, それが「暴力」にあたるかどうか, 「完全に暴力にあたる」(7 点)から「全く暴力にあたらない」(1 点)までの 7 件法で尋ねた。

3) デート DV 加害暴力観

被害観と同様に 34 項目を作成し, 彼氏・彼女として交際中の相手にした場合, それが「暴力」にあたるかどうか, 「完全に暴力にあたる」(7 点)から「全く暴力にあたらない」(1 点)までの 7 件法で尋ねた。

4) ジェンダー観

伊藤 (1997) の性差観スケール 30 項目を用いて, 「そう思う」(4 点)から「そう思わない」(1 点)の 4 件法で尋ねた。得点が高いほど, ジェンダーに関わる事柄を性別に関連づける認知的枠組みが強いことを示している。

5) 社会的望ましさ

北村・鈴木 (1986) の社会的望ましさ尺度 10 項目を用いて, 「はい」(2 点),「いいえ」(1 点)の 2 件法で尋ねた。合計点が 18 点以上は社会的望ましさが高く, 回答に偏りが示される可能性があるため 18 点未満を分析対象とした。

4. 倫理的配慮

予備調査・本調査ともに, 匿名性が保証されていること, 回答が任意であり, 協力しないことによる不利益が一切ないことを表紙に明記し, 質問紙の配布時に口頭でも教示した。また, 本研究は福山大学研究安全倫理会の承認を得て行なわれた(R 元ーヒトー5 号)。

5. 分析方法

本研究の分析では, 統計解析ソフト IBM SPSS Statistics 23 を使用し, 因子分析および 3 要因の分散分析を実施した。

結　果

＜予備調査＞

尺度項目を作成するための予備調査の結果, 身体的な暴力では「平手で殴る」「蹴る」「髪の毛を引っ張る」「噛む」「たたく」「首を絞める」「縛り付ける」「馬乗りになる」「つねる」などがあった。特に多かったのは「平手で殴る」の 34 名 (61.8%) と, 「蹴る)」の 18 名 (32.7%) であった。

精神的な暴力では「罵倒する」「人格の否定」「何でも相手のせいにする」「無視する」「友人関係の制限」「嘘をつく」「言うことを聞かす」「別れを告げたら脅して別れない」などがあった。その中で多かったのは「罵倒する」の 44 名 (80%) と, 「人格の否定」の 18 名 (32.7%) であった。

経済的な暴力では「お金を借りる」「借金をして返さない」「勝手にお金を使う」「プレゼントの強要」「割り勘ではない」などがあった。その中で「借金して返さない」が 26 名 (47.3%) と最も多かった。

性的な暴力では「性行為の強要」「避妊に協力しない」「嫌がっているのに触る」「裸の写真を撮る」などがあった。その中で「性行為の強要」が 34 名 (61.8%) で特に多く回答されていた。

SNS に関する暴力では「個人情報を SNS に載せる」「SNS を勝手にみる」「メールやメッセージを大量に送りつける」「リベンジポルノ」「返信をしない」などがあった。その中で「個人情報を SNS に載せる(23 名)」が 23 名 (41.8%) と最も多かった。

以上の項目や CTS2 の暴力項目を参考とし, 暴力の種類, 程度 (重度・軽微) などを考慮し, 身体的暴

力 6 項目, 精神的暴力 12 項目, 経済的暴力 5 項目, 性的暴力 5 項目, SNS に関する暴力 6 項目の計 34 項目を尺度の候補項目とした (Table 1)。精神的暴力については, 赤澤・竹内 (2015) の分類に倣い「孤立させる」「「自尊心を低下させる」「服従させる」の 3 つに分類した。また,SNS に関する暴力は, 精神的暴力や性的暴力に分類することが出来る項目もあるが, 今回は 1 つのカテゴリーとした。

Table 1. デート DV 観の暴力候補項目

暴 力 項 目
身体的暴力
1. つねったり, こづいたりする
2. 平手（ビンタ）で殴る ※
3. 腕や髪を引っ張る ※
4. 蹴ったり拳(グー)で殴る ※
5. 物を使って身体を殴る ※
6. 壁にたたきつける ※
性的暴力
7. 無理矢理キスしたり、身体に触れたりする
8. 相手が性交に応じないと不機嫌になる
9. 避妊に協力しない ※
10. 性交を強要する（物理的な力は使用しない） ※
11. 力づくで性交を強要する ※
精神的暴力：孤立させる
12. 友人との付き合いを制限する
13. いつも行き先を告げさせたり, 報告させたりする
14. いつも一緒にいることを要求する
15. 家族や友人の悪口を言う
精神的暴力：自尊心を低下させる
16. 侮辱したり, ののしったりする ※
17. 相手を否定したり, 相手の意見を認めなかったりする
18. 身体的な特徴について悪口を言う ※
19. 相手が意に沿わないと無視する
精神的暴力：服従させる
20. うまくいかないと何でも相手のせいにする
21. 大声で怒鳴る ※
22. 相手の持ち物を壊す※
23. 別れるなら死んでやると言う
経済的暴力
24. 借りたお金を返さない
25. 相手の許可無しに, 相手のお金を使う
26. お金や物がほしいとねだる
27. いつも奢ってもらう
28. 奢ってあげる代わりに見返りを求める
SNSに関する暴力
29. 個人情報が分かるような写真をSNSに載せる
30. 性的な画像をインターネットなどで勝手に公開する
31. 相手の許可無しにスマートフォン（または携帯電話）のメールやメッセージの内容を見る
32. 相手の許可無しにスマートフォン（または携帯電話）のメールアドレスや連絡先を消す
33. メールやメッセージを大量に送りつける
34. メールやメッセージの返信をしない
注） ※はCTS2にも含まれている項目

＜本調査＞

1. デート DV 暴力観尺度の構造

デート DV 加害および被害暴力観の項目について因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行い，負荷量の低い項目や2因子において同程度の負荷量であった項目を削除し再度因子分析を行なった結果，3 因子構造が認められた (Table 2)。

Table 2.　デート DV 暴力観の因子分析結果

暴　力　項　目	因子 F1	F2	F3
＜精神的暴力＞			
Q18 自分の意に沿わないと無視する	**.955**	-.100	-.141
Q17 相手を否定したり，相手の意見を認めなかったりする	**.922**	-.116	-.076
Q4 大声で怒鳴る	**.818**	.105	-.076
Q22 相手の許可無しにスマートフォン（または携帯電話）のメールアドレスや連絡先を消す	**.809**	.044	-.064
Q11 うまくいかないと何でも相手のせいにする	**.807**	.063	.008
Q15 あなたの許可無しにスマートフォン（または携帯電話）のメールやメッセージの内容を見る	**.798**	.028	-.021
Q16 家族や友人の悪口を言う	**.726**	.003	-.066
Q32 相手の許可無しに，相手のお金を使う	**.716**	.172	-.036
Q10 いつも奢ってもらう	**.695**	-.086	.200
Q23 奢ってあげるかわりに見返りを求める	**.685**	-.106	.181
Q31 身体的な特徴について悪口を言う	**.659**	.157	-.015
Q12 メールやメッセージを大量に送りつける	**.642**	-.119	.133
Q28 いつも行き先を告げさせられたり，報告させられたりする	**.640**	-.188	.172
Q24 侮辱されたり，ののしったりする	**.624**	.219	-.044
Q7 相手の持ち物を壊す	**.539**	.298	.048
Q14 別れるなら死んでやると言う	**.521**	.131	.192
Q30 個人情報が分かるような写真をSNSに載せる	**.474**	.348	.081
＜身体的暴力＞			
Q33 壁にたたきつける	-.047	**.919**	-.078
Q21 平手（ビンタ）で殴る	-.058	**.851**	.010
Q29 物を使って身体を殴る	-.053	**.792**	.031
Q20 腕や髪を引っ張る	-.021	**.694**	.060
Q3 蹴ったり掌（グー）で殴る	.127	**.689**	-.027
＜性的暴力＞			
Q5 無理矢理キスしたり，身体に触れたりする	-.056	.000	**.890**
Q19 性交を強要する（物理的な力は使用しない）	.060	.105	**.775**
Q9 相手が性交に応じないと不機嫌になる	.397	-.227	**.629**
Q27 力づくで性交を強要する	-.174	.433	**.621**
F1	1.000	.554	.621
F2	.554	1.000	.526
F3	.621	.526	1.000

注）因子分析は加害・被害項目を合わせて行ったが，暴力項目には加害項目を表記した。

第 1 因子は，「自分の意に沿わないと無視する」や「相手を否定したり，相手の意見を認めなかったりする」といった，精神的暴力，経済的暴力，SNS に関する暴力 17 項目から構成されており，身体的な暴力や性的な暴力は含まれていなかったため「精神的暴力」と命名した。第 2 因子は，「壁にたたきつける」や「平手 (ビンタ) で殴る」といった 5 項目から構成されていることから「身体的暴力」と命名した。第 3 因子は,「無理やりキスをしたり，身体に触れたりする」や「性交を強要する」といった 4 項

目から構成されていたため「性的暴力」と命名した。

尺度の内的整合性を検討するために，因子ごとにクロンバックのα係数を算出したところ，加害観の「精神的暴力」はα=.936，「身体的暴力」はα=.745，「性的暴力」はα=.825 であった。また，被害観では「精神的暴力」がα=.959，「身体的暴力」はα=.839，「性的暴力」はα=.896 であった。

尺度の構成概念的妥当性を検討するために，Straus et al. (1996) による CTS2 に含まれている項目と本研究で新に作成した項目との Pearson の相関係数を算出したところ，加害観で r =.786 (p<.001)，被害観で r=.783 (p<.001) であった。

2. 性別およびジェンダー観による被害観・加害観の差異

ジェンダー観の平均値 2.12 点より高い者を高群，低い者を低群とした。また，被害観および加害観については,下 位尺度を構成する項目の平均値を用いた。性別およびジェンダー観による被害観・加害観の違いを検討するために，2 (性別：男性・女性) ×2 (ジェンダー観：低群・高群) ×2 (暴力観：被害観・加害観) の 3 要因の分散分析を行った (Table 3)。

その結果，精神的暴力において，暴力観と性別の交互作用が有意だった(F (1, 83)=6.37, p<.05, η^2=.07)。単純主効果検定の結果，精神的暴力において，女性は被害観が加害観より暴力としての認識が高く (p<.05)，女性は男性より被害観が高い傾向にあった (p<.10)。身体的暴力においては，暴力観の主効果が有意で (F (1, 83)=8.13, p<.01, η^2=.09)，暴力観と性別の交互作用も有意だった (F (1,83)=16.56, p <.001, η^2=.17)。単純主効果検定の結果，男性の加害観が被害観より高く (p<.01)，女性は男性より被害観が高かった (p<.01)。性的暴力では，暴力観と性別の交互作用が有意だった (F (1, 83)=8.25, p <0.01, η^2=.09)。単純主効果検定の結果，男性の加害観が被害観より高く (p<.05)，女性は男性より被害観が高かった (p<.01)。また，性暴力では性別と性差観の交互作用に傾向差が示された (F (1, 83) =3.76, p <.10, η^2=.04)。下位検定の結果，高群の男性は，低群の男性より被害観・加害観がともに低かった (p<.05)。また，高群の女性は，低群の女性より性被害観が低い傾向が示された (p<.10)。さらに，高群において，女性は男性より被害観・加害観ともに高かった (p<.05)。

Table 3. 性別およびジェンダー観による被害観・加害観の差異

		被害観				加害観			
	性別	男性		女性		男性		女性	
	ジェンダー観	低群 (N=18)	高群 (N=18)	低群 (N=25)	高群 (N=26)	低群 (N=18)	高群 (N=18)	低群 (N=25)	高群 (N=26)
精神的暴力	平均	**5.42**	**4.93**	**5.70**	**5.70**	**5.73**	**5.05**	**5.61**	**5.53**
	SD	1.42	1.48	0.87	0.95	1.06	1.09	0.91	0.96
身体的暴力	平均	**6.23**	**6.00**	**6.69**	**6.64**	**6.57**	**6.60**	**6.62**	**6.55**
	SD	1.03	0.99	0.47	0.52	0.75	0.39	0.48	0.52
性的暴力	平均	**5.65**	**4.24**	**6.21**	**5.69**	**6.06**	**4.76**	**5.97**	**5.66**
	SD	1.42	2.02	0.76	1.15	1.05	1.44	0.90	0.90

考　察

1.デート DV 暴力観尺度の作成について

まず，予備調査やCTS2を用いて，身体的暴力・精神的暴力・経済的暴力・性的暴力・SNSを用いた暴力の5つに項目を分類し，尺度の候補項目を選別し，因子分析により尺度の構造を検討した。その結果，「精神的暴力」「身体的暴力」「性的暴力」の3側面が見出された。各下位尺度の内的整合性は高く，構成概念的妥当性も高かった。しかし，精神的暴力，経済的暴力，SNSによる暴力が1つの因子として抽出され，暴力の分類が想定通りではなかった。精神的暴力には多種多様な暴力が含まるため，その内容によって暴力観は大きく異なる (赤澤, 2016) ため，欧米ではいくつかの下位尺度から成る精神的暴力のみに特化した尺度が開発されている (e.g., Tolman, 1989; Sullivan, Parisian, & Davidson, 1991)。本研究で作成した尺度は，CTS2と比較すると現代の若者が経験する可能性がある多様な精神的暴力を捉えうる尺度にはなっているが，精神的暴力が1因子となったため，精神的暴力の種類ごとの被害観や加害観の差異を検討することができなかった。

２.性別およびジェンダー観による被害観・加害観の違い

性別およびジェンダー観による被害観・加害観の差異について検討した結果，暴力の認識においてジェンダー観より性別による差異が顕著であることが明らかとなった。

まず，精神的暴力において女性は男性より被害観が高い傾向にあり，女性は被害観が加害観より高いことが明らかになった。Frieze & Davis (2000) は，身体的暴力における男女のダメージの差を指摘していたが，精神的暴力の被害においても女性は暴力としての認識が男性より強い可能性が本研究結果より示された。赤澤・竹内 (2015) では,「(交際相手の) 意に沿わないと無視される」や「(交際相手が) 腹を立てたとき，大声で怒鳴られる」の項目において，被害経験の暴力頻度とダメージとの間に，身体的暴力や性的暴力に匹敵するほど高い相関が示されていた。精神的暴力は傷害の程度も目に見えにくく軽視されがちであるが，特に女性においては何度も繰り返し受けることによるダメージは大きいことから，その影響を考慮に入れ慎重に対応する必要があるといえる。

また，精神的暴力では，女性において加害観より被害観のほうが高かったことから，加害より被害側の方が暴力として捉えやすいことが明らかとなった。田吹・岡本 (2016) は，精神的暴力を暴力と認識していない傾向があることが，精神的暴力の経験率の高さの原因であると指摘している。つまり，精神的暴力における加害と被害との間の暴力としての認識のずれが，女性から男性への精神的暴力加害を生じやすくさせる危険性もあることに注意しなければならないだろう。

次に，身体的暴力においては，女性は男性より被害観が高く，男性において加害観が被害観より高いという結果が示された。上述したように身体的暴力における性差が指摘されているが，本研究においても同様の結果が示されたといえる。女性が身体的暴力の被害を強く感じるだけでなく，本研究より男性自身が，男性から女性への暴力加害の大きさを認識していることが明らかになった。デート DV 研究では，身体的暴力については女性の加害頻度が男性より高いことが指摘されているが (e.g., Archer, 2000)，本研究の結果より，頻度だけでなく暴力の結果としての被害におけるジェンダー差にも注目する必要性が示唆された。

性的暴力においても，身体的暴力と同様に，女性は男性より被害観が高く，男性において加害観が被害観より高いという結果が示され，女性が男性より暴力被害観が高いだけでなく，男性自身もまた男性から女性への暴力加害の大きさを認識していることが分かった。性的暴力はジェンダーの非対称性が強く反映された暴力であり，異性愛カップルの性的暴力では，被害者は女性，加害者は男性という構図が明確であるとされてきた (赤澤, 2015) が，本研究の対象者の認識もこれに一致していることが示唆された。

性的暴力では，唯一ジェンダー観による差異が示されており，ジェンダー観が高い男性は，ジェンダー観が高い女性やジェンダー観が低い男性より，性的暴力の被害観および加害観が低かった。また，ジェンダー観が高い女性は低い女性より，被害観が低い傾向であった。性的暴力に対する認識度については，男性が女性より低いことを示す研究が多い（e.g., 李・塚本, 2005）が，ジェンダー観が高い男性において，性的暴力の被害・加害を過小評価する傾向が高いことが本研究結果より明らかとなった。赤澤 (2000) によれば，大学生対象の調査において「性交渉で男性は女性をリードする」という性規範は，その他の規範より肯定する者の率が高いということである。このような規範を反映し，実際性交渉の進展に伴い，男性がイニシアチブを取ることが多くなることが明らかになっている (永田, 2013)。ジェンダー観が高い男性においては，このような性規範の刷り込みが強いため，強引な性的行動を暴力だと認識しにくい可能性がある。

３.今後の研究における課題

本研究では，現代社会の若者におけるデートDV暴力を捉えうる尺度の作成を第1の目的としてあげていたが，多岐に亘る精神的暴力を捉えうる尺度を開発するに至らなかった。今後は調査対象者の人数を増やすとともに，更に項目内容を検討し，多様な精神的暴力を捉えることが出来る尺度を検討する必要がある。親密な関係であるほど精神的暴力を抑制する言動を取りにくくなること (相馬・浦, 2010) ，身体的暴力に先行して精神的暴力が行使されること (O'Leary, 1999) を勘案すると，精神的暴力について詳細に検討するための尺度の開発は急務であると考えられる。

これまでデートDVの調査では，生物学的な性差で分析されることが多かったが，本研究で示されたようにジェンダー観が影響する可能性があるため，今後はジェンダー観も含めて検討する必要があるだろう。

【謝辞】本研究は JSPS 科研費 JP16K01805 の助成を受けたものである。

引用文献

赤澤 淳子. (2000). 性別役割行動の再生産システムとしての性別役割規範　今治明徳短期大学紀要, **24**, 39-53.

赤澤 淳子 (2015). 親密な二者関係のダークサイドとしてのデート DV　発達心理学研究, **26**, 288-299.

赤澤 淳子 (2016). 国内におけるデート DV 研究のレビューと今後の課題　福山大学人間文化学部紀要, **16**, 128-146.

赤澤 淳子・竹内 友里 (2015). デート DV における暴力の構造について―頻度ダメージとの観点から　福山大学人間文化学部紀要, **5**, 51-72.

Archer, J. (2000). Sex differences in aggression between heterosexual partners: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, **126**, 651-680.

Arias, I., & Johnson, P. (1989). Evaluations of physical aggression among intimate dyads. *Journal of Interpersonal violence*, **4**, 298-307.

Dibble, U., & Straus, M. A. (1980). Some social structure determinants of inconsistency between attitudes and behavior: The case of family violence. *Journal of Marriage and the Family*. **42**, 71-80.

Frieze, I. H. (2008). Social policy, feminism, and research on violence in close relationships. *Journal of Social*

Issues, **64**, 665-684.

Frieze, I. H, & Davis, K. (2000). Introduction to stalking and obsessive behaviors in everyday life: Assessments of victims and perpetrators. *Violence and Victims,* **15**, 3-5.

林 翔太・山本 雄平・中村 健二・田中 成典 (2015). Web サイトの動的な変化を考慮したコンテンツ探索手法に関する研究　情報処理学会第 77 回全国大会講演論文集, **1**, 781-782.

伊田 宏行 (2010). デート DV と恋愛　大月書店.

伊藤 裕子 (1997). 高校生における性差観の形成環境と性役割選択－性差観スケール（SGC）作成の試み　教育心理学研究, **45**, 396-404.

北村 俊則・鈴木 忠治 (1986). 日本語版 Social Desirability Scale について　社会精神医学, **9**, 173-180.

永田 夏未 (2013). 青少年にみるカップル関係のイニシアチブと規範意識　財団法人日本児童教育振興財団内　日本性教育協会　「若者の性」白書－第７回　青少年の性行動全国調査報告　小学館 pp.101-120.

内閣府 (2018). 男女間における暴力に関する調査.
Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/h29danjokan-12.pdf　(2021 年 1 月 4 日).

西岡 敦子・小牧 一裕 (2009).「リプロダクティブ・ヘルツ/ライツ」に関する調査Ⅷ 第 2 報　国際研究論叢：大阪国際大学紀要, **22**, 36－53.

O’Leary, K.D. (1999). Psychological abuse: A variable deserving critical attention in domestic violence. *Violence and Victims*, **14**, 3-23.

鈴木 由美 (2007). モラル･ハラスメントに関する研究(第一報)－看護職がみる夫婦間の精神的暴力　日本ウーマンズヘルス学会, *6*, 47－55.

田吹 和美･岡本 正子 (2016). 高等学校家庭科における児童虐待予防教育の実践と課題－「デート DV」の授業を通して　生活文化研究, **54**, 1-14.

李 環媛・塚本 宣子 (2005). デイティング DV に関する研究－大学生の実態調査に基づいて　宮崎大学教育文化学部紀要, **13**, 1－18.

相馬 敏彦・浦 光博 (2010). 「かけがえのなさ」に潜む陥穽－協調的志向性と非協調的志向性を通じた二つの影響プロセス　社会心理学研究, **26**, 131-140.

Straus, J.A. (1979). Measuring intrafamily conflict and violence: The conflict tactics (CT) scales. *Journal of Marriage and the Family*, **41**, 75-88.

Straus, J.A., Hamby, S.L., Boney-McCoy, S., & Sugarman, D.B. (1996). The revised Conflict Tactics Scales(CTS2)：Development and preliminary psychometric data. *Journal of Family Issues*, **17**, 283-316.

Sullivan, C.M., Parisian, J.A., & Davidson, W.S. (1991). *Index of psychological abuse: Development of a measure*. Poster presentation at the annual conference of the American Psychological Associations, San Francisco, CA.

Tolman, R.M. (1989). The development of a measure of psychological maltreatment of women by their male partners. *Violence and Victims*, **4**, 159-177.

Wolfe, D.A., Crooks, C.C., Chiodo, D., & Jaffe, P. (2009). Child maltreatment, bullying, gender-based harassment, and adolescent dating violence: Making the connections. *Psychology of Women Quarterly*, **33**, 21-24.

Differences in the Views between Damage and Harm in Dating Violence

Junko AKAZAWA, Atsuko INOSAKI, Junko UENO, Tomoko MATSUNAMI, Koudai FUKUDOME

This study first developed a dating violence scale to examine the view of violence among today's youth, and analyzed the view of damage and harm related to genders and gender schemas based on 84 university students. The results indicated that the female's views of mental, physical and sexual damages were stronger than male's, and that male with strong gender schemas has weak view of sexual harm and damage.
【Keywords: dating violence, damage, harm】